

すべては、子どもたちの未来のために
 『全国学力・学習状況調査』の結果を受けて
 ～大田原市の成果と課題～

全国学力・学習状況調査への
 全校参加

平成19年度から21年度の3年間、文部科学省は、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るなどを目的に、全国の小・中学校を対象とした「全国学力・学習状況調査」を実施してきました。本市の小・中学校もすべて参加してきました。

今年度から本調査は抽出調査となりましたが、これから求められる学力を調査する全国規模の唯一の調査であり、また、平成19年度の小学校6年生が今年度中学校3年生になることから、経年の比較をする上でも重要な年になると判断し、本市では抽出校以外の学校も希望利用校として調査に参加しました。

本市の結果 ～初めて小学校
 算数Bで全国平均を上回る～

調査は、平成22年4月に小学6年生と中学3年生を対象として実施されました。対象教科は、国語と算数

【平成22年度全国学力・学習状況調査問題の平均正答率】(単位 %)

区分	大田原市	全国	全国比較	栃木県	県比較	
小学校	国語A(知識)	84.8	83.3	1.5	82.9	1.9
	国語B(活用)	75.2	77.8	-2.6	77.2	-2.0
	算数A(知識)	78.5	74.2	4.3	74.8	3.7
	算数B(活用)	51.9	49.3	2.6	49.0	2.9
中学校	国語A(知識)	78.3	75.1	3.2	74.8	3.5
	国語B(活用)	67.6	65.3	2.3	65.8	1.8
	数学A(知識)	69.8	64.6	5.2	63.8	6.0
	数学B(活用)	49.6	43.3	6.3	42.8	6.8

(数学)であり、それぞれ基礎的な内容を問うA問題と、実際の社会での活用力を問うB問題からなっています。

本市の今年度の結果を見ると、小

- ※ 大田原市の数値は、抽出調査と希望利用校の数値を合算処理したものです。
- ※ 全国・栃木県の数値は、文部科学省公表の抽出校のものです。
- ※ 全国比較・県比較は、「大田原市-全国」、「大田原市-栃木県」を表します。

【小学校算数B(活用)の全国比較・県比較の経年変化】

区分	H22	H21	H20	H19
大田原市	51.9	54.6	49.9	62.1
全国	49.3	54.8	51.6	63.6
全国比較	2.6	-0.2	-1.7	-1.5
栃木県	49.0	53.3	50.7	62.1
県比較	2.9	1.3	-0.8	0.0



学校の国語B(活用)以外は全国平均、栃木県平均を上回っています。これまでの結果との比較から特筆すべき点は、小学校の算数B(活用)で初めて全国平均を上回ったことです。

本市ではすべての学校で算数・数学の授業において、T・T(ティームティーチング)や支援助手の配置により複数での指導体制となっています。各学校では、1学級を複数で指導したり、1学級を複数に分割し

基礎学力向上研究委員会から
 の報告

本市の結果については、市内小・中学校の校長、教頭、学習指導主任の各代表10名から構成されている「基礎学力向上研究委員会」においてその結果を分析し、特に今年課題となっている「国語B」についての今後の取り組みについて検討しました。

以下は同委員会から教育長に報告された内容です。

1 小学校の国語の授業について

(1) 課題

- ・ 授業がパターン化の傾向
- ・ 教科書の指導書のままの指導
- ・ 授業のねらいに沿った力の定着が
あいま
- ・ テストでの字数を制限したり、思
ったことを書いたりすることの不足
- ・ 写真や絵を分析する教材指導上の
対応

(2) 対策

- ・ 低学年で視写等を取り入れ、正確
に速く書く習慣を身に付ける。
- ・ ねらいに応じたさまざまな読みの
指導を意識する。

て少人数による指導をしたりするなどさまざまな工夫をしています。こうした各学校での改善を重ねた取り組みが、今回の成果へとつながっていると考えられます。

- ・ねらいに沿ってさまざまな形で表現する活動を取り入れていく。
- ・字数を制限して書かせる指導を意識する。
- ・高学年での教科担任制を部分的に導入することの検討。
- ・現職教育で各種検査の分析をもとにポイントをしぼった取り組みを行う。

2 家庭学習について



- (1)課題
 - ・国語は「漢字」と「音読」というパターンだけである。
 - ・授業での見とりや各種テストでの評価を生かして出されていない。
 - ・国語に関しては家庭学習の方法が分からない児童が多い。
- (2)対策
 - ・課題となつている部分に適切な宿題を課す必要がある。
 - ・ねらいに応じたさまざまな学習の方法を提示して、身に付けさせる必要がある。
 - ・各種教育団体の国語部会でも家庭学習の取り組み方法についても話し合う必要がある。

3 市独自の計算・漢字ドリル「ホップ・ステップ・ジャンプ」について

- (1)課題
 - ・中間層を伸ばすことにはかなり成果がある。

- ・上位層、最下位層を伸ばすのは難しい。
- ・時間的な制約が大きくなっている。
- (2)対策
 - ・国語部会、算数部会でも取り組み方法について検討する必要がある。
 - ・ねらいに沿って、どこまで求めるかを各学校でも検討する必要がある。
 - ・早く終了した児童は上級の問題を準備して取り組ませる。

4 読書指導について



- (1)課題
 - ・朝の読書をしていても、読む内容に個人差があり、発達段階に応じていない。
 - ・保護者アンケート、児童アンケートでも読書への取り組みに対し、課題をもっている割合が高い。
 - ・司書が入っていないので、ボランティアに整備をお願いしている学校が多い。しかし、ボランティアによって、その専門性に年度、学校差がある。
 - ・学校図書館は整然と本が並べられているが、児童が手に取る手立てについては、まだまだ不十分である。
- (2)対策
 - ・ボランティアについてアドバイスできるようなアドバイザーが各学校を巡回することが必要である。
 - ・学習指導要領にある発達段階を踏

また読書材が読めるような指導が必要である。低学年は物語に親しませ、中学年はさまざまなジャンルに挑戦させ、高学年では読んだ資料に対して考えさせるなど発達段階を意識して指導する。

・各種教育団体の国語部会でも読書指導について話し合う機会を設け、具体策を提案できるようにするとよい。

5 市教育委員会の施策への要望について

- (1)市教職員のコンピュータネットワークを活用したカリキュラムセンターの開発
 - ア ねらい
 - ・ネットワークを活用し、各学校で実践して成果のあった指導事例を他校でも簡単に活用できるようにする。
 - イ 方法
 - ・掲示板などに内容ごとのフォルダを作り、各先生方がワークシートや指導案等を載せて、他校も利用できるようにする。
 - ・市の研究学校や教育会での取り組みを紹介し、活用できるようにする。
- (2)学校図書館ボランティアの支援事業
 - ア ねらい
 - ・学校図書館ボランティアは学校による差があるので、子どもたちに本を薦める活動を進めるため支援

し円滑に活動できるようにする。

イ 方法

- ・市立図書館勤務の司書や経験豊富な市図書館ボランティアなどが各学校を回り、利用しやすい図書館の整備や図書購入について支援を行ったリ、学校図書館ボランティアを指導したりする場を提供する。

全国学力・学習状況調査結果を受けての取り組み

学校教育課では、市基礎学力向上研究委員会の教育長への報告を受け、平成22年12月1日付けで各小中学校にも同報告書を配布しました。さらに、来年度に向け要望事項について市教育委員会生涯学習課とも連携し、検討を始めました。

全国学力・学習状況調査では、これからの社会で生きていく上で必要とされる学力が示されていると言われていきます。本市では、子どもたちの未来のために本調査結果の分析を進め、授業改善を含めたさまざまな角度から学校教育の改善に生かしていくよう継続的に取り組んでいく予定です。

今後、広報おたわらで市内各学校での取り組みについて紹介していく予定です。

問い合わせ

学校教育課 学校教育係
TEL (98) 7113

